

大塚遺跡には何軒の住居跡があったのか？

高橋 健

はじめに

横浜市大塚遺跡は弥生時代の環濠集落の全面発掘例として知られている。長さ200m、幅130mのカシューナッツ形をした環濠に囲まれた集落には、多数の竪穴住居が作られていた（図4）。そこには一体何軒の住居跡があったのだろうか？

集落遺跡における住居数といえば、同時存在の数が問題となることが多い。大塚遺跡でも、5段階ないし6段階の建て替えが想定され、同時存在の住居数は20～30軒程度と推測されている。だがここで問題にしたいのは、そのような同時存在の住居数ではなく、あくまで発掘調査によって見つかった住居跡の数である。発掘された住居跡の数については発掘調査報告書に従うのが常道であるが、後述するように大塚遺跡では報告書内でも記述に揺れがあり、その後も微妙に異なるいくつかの数字が公表されてきた経緯がある。筆者自身もこれまで、「約90棟」（佐々木・高橋他2020）、「100軒以上」（高橋2021）など、あいまいな数字を提示してきた。

こうした事態が生じた背景には、重複拡張例をどのように数えるのかという問題と、個別の遺構の評価についての見解の相違がある。もちろん、それぞれの論者においては十分に掘り下げて検討をされてきたことと思うが、どの住居をどう数えたのか、具体的に説明されることは少なかった。

本稿では、まずこれまでに大塚遺跡の住居跡の数について公表されてきた数字を比較し、そこにばらつきがみられることを確認する。続いて見解が分かれそうな事例について検討を加えた上で、いくつかの基準にしたがってカウントを行ってみたい。

1 従来公表されてきた住居跡数の比較

大塚遺跡の発掘調査では、弥生時代の住居跡には、Y1号からY86号までの番号が与えられた。しかし、だからといって環濠集落の住居跡数が86軒だということにはならない。この「86」という数には弥生時代後期の住居跡も含まれていることに加え、重複する住居をどのように数えるのかという問題があるためである。概報・報告書における宮ノ台式期（中期）の住居跡数についての記載と、横浜市歴史博物館や横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センターが関わって刊行された図録や出版物での記載を、表1にまとめた。このほかに集落研究の中で大塚遺跡を取り上げ、その住居数を示した事例も多いが、基本的には報告をどう読みとったかという問題であるため、悉皆的に集成することはしていない。新たな解釈が加わっていると思われる例については、以下の文中では必要に応じて触れることにしたい。なお以下の本文中では、遺構の名称は「住居跡」、単位は「軒」に統一する。

1990年まで（報告書刊行以前）

1976年に刊行された発掘調査概報（A1）では、総数を97軒とした上で、中期宮ノ台式期が90軒という数が示された。ここに掲載された「弥生時代住居址一覧表」（A2）には、住居跡数が記されていないが、枝番を含めて138軒が掲載されている。これは後期や時期不明の住居跡も含めた数であり、「宮ノ台」「宮ノ台？」とされた住居跡を数えると120軒である。1986年の『古代のよこはま』（B）では約90軒、1990年の『全遺跡調査概要』（C）でも90軒という数が示された。A1・B・Cでは重複をどう数えたか明記されていないが、住居番号の86よりも大きいから、ある程度区別されているのは間違いない。

1990年代前半（発掘調査報告書刊行）

1991年には発掘調査報告書の遺構編が刊行されたが、この中にいくつかの異なる数が記載されていた。発掘の概況（D1）では宮ノ台式期の住居跡が「100軒強」とされたほか、「表1 弥生時代住居址一覧表」（D2）が掲載された。枝番をもつ住居跡が126軒、うち宮ノ台式期が112軒となっており、概報の表（A2）から8ないし12軒が削除されている¹。宮ノ台式期の竪穴住居跡についての考察（D3）では、「総延数」として115軒という数が示された。集落についての考察（D4）では、連続的重複を含まない数として85軒が示された。これは「単独型と不連続重複例」を集計した83軒に、未完の「竪穴状遺構」とされたY54号と、環濠外のY86号を加えた数だという。これに連続的重複を加算した数は「100軒ほど」とされている。

1994年には報告書の遺物編が刊行され、考察（E）で弥生時代中期の数が90軒とされた。報告遺構編（D1～4）ではなく、それ以前の内容を引き継いだものである。

1990年代後半～2000年代（報告書刊行後）

1995年に開館した横浜市歴史博物館の『常設展示案内』（F）では約90軒、同年に開催された特別展「弥生のいくさと環濠集落」の図録（G）では114軒となっている。後者は環濠の内側に限定しているので、環濠外側の1軒を加えればD3と同じ115軒である。1996年刊行の大塚遺跡の史跡整備事業報告書（H）や1997年刊行の大塚・歳勝土遺跡公園の案内（I）では、環濠外を含めて85軒とされた。

1997年に倉林は大塚遺跡の竪穴住居を分析した論文中で、環濠内で125軒という数を示した（倉林1997）。この数は、「同心円状の拡張や柱の建て替えも含めて、報告書で番号を付された住居址の総戸数」だとされる。後期の7軒を含み、環濠外の1軒は含んでいない。この環濠内125軒（うち中期118軒）という数そのものは報告書にはないが、その根拠は報告書遺構編（D2）の「弥生時代住居址一覧表」に求めることができる（126軒から環濠外の1軒を引いた数である）。

2001年の横浜市歴史博物館特別展「甦る大環濠集落」の図録（H）では、環濠の内側に「100軒近い」住居跡が分布するとされた。2006年の『弥生の人々の眠る場所』図録（K）では環濠の内側に「110軒以上」、2009年の『横浜歴史と文化』（I）では「90軒を越す」といずれも幅をもたせた記述である。

公に刊行されているものではないが、横浜市歴史博物館の開館当時から実施されている大塚遺跡のガイドボランティアに配布されているマニュアルには、「住居址は調査時に番号を付したものは80軒ですが、非連続的重複の住居を別物として数えると85軒、さらに連続的重複の住居をすべて数えると115軒となります。」との記載がある（2003年版を確認）。85軒・115軒はそれぞれ報告遺構編D4・D3を引き継いでいる。80軒という数は、番号を付された86軒から後期の6軒を引いて算出したものと思われる。

表1 大塚遺跡の住居跡数についての報告・図録類での記載（中期）

書名	刊行年	記載場所	執筆者	数	重複	範囲	内容
A1	1976	V-2 住居址とその遺物	武井則道	90軒		全体	「総数97個が発見されている。そのうち、90個が中期宮ノ台式期」(p.101)
A2	同上	弥生時代住居址一覧表	同上	(120軒)	含む	全体	弥生時代138、うち宮ノ台117、宮ノ台? 3、久ヶ原1、久ヶ原・朝光寺原3、朝光寺原3、時期不明11
B	1986	大塚・歳勝土遺跡		約90軒		全体	「堅穴住居址約90軒」(p.96)
C	1990	大塚遺跡(C8・9)	伊東郭・山口隆夫	90軒		全体	「97軒（中期宮ノ台：90、後期・朝光寺原：7）」(p.38)
D1	1991	II-2-b 発掘の概況	武井則道	100軒強		全体	「宮ノ台期の住居址は100軒強が発見されている。」(p.32)
D2	同上	表1 弥生時代住居址一覧表	同上	(112軒)	含む	全体	弥生時代126、うち宮ノ台111、宮ノ台? 1、後期1、久ヶ原・朝光寺原5、朝光寺原1、時期不明7
D3	同上	VI-1 堅穴住居址の構造と分析	坂上克弘	115軒	含む	全体	「大塚遺跡の総延数115軒の宮ノ台式期の住居址群」(p.422)
D4	同上	VI-3-a 中期集落の構成要素	小宮恒雄	85軒／100軒ほど	並記	全体	「検出された遺構は堅穴住居址85軒」(p.452) 「単独型と不連続的重複例について集計すると83軒」「これに連続的重複例を加算すると、100軒ほど」「83軒としたが、これには未完の堅穴住居とみられるY54号堅穴状遺構と、東方の環濠外に単独で存在するY86号の2軒が入っていない。」(p.453)
E	1994	V 大塚人の生活	岡本勇	90軒		全体?	「大塚遺跡で発見された97軒の堅穴住居址」「この内、西南部に塊まっている7軒が弥生時代後期のものであるほかは、すべて中期末に属し」(p.434)「環濠内には90軒の堅穴住居址が発見された」(p.435)
F	1995	大塚・歳勝土遺跡の発掘		約90軒		環濠内?	「ムラの中からは、約90軒の住居跡がみつかりました。」(p.26)
G	1995	V-1 鶴見川流域の弥生時代中期の環濠集落群	安藤広道	114軒		環濠内	「環濠の内側からは114軒の堅穴住居跡が見つかりました。」(p.56)
H	1996	I-1-b 堅穴住居址	小宮恒雄	85軒		全体	「弥生時代中期の堅穴住居址は、85軒が検出された。」「このうち1軒は環濠の外にあり」「総数85軒」(p.7)
I	1997	史跡 大塚・歳勝土遺跡		85軒		全体	「弥生時代中期の85軒の住居跡が発見されました。」
J	2001	大塚・歳勝土遺跡の発掘	小宮恒雄	100軒近い		環濠内	「環濠の中に100軒近い堅穴住居址が分布する集落」(p.96)
K	2006	大塚遺跡	中川二美	110棟以上		環濠内	「環濠の内側からは110棟以上の堅穴住居が見つっています。」(p.8)
L	2009	環濠集落と方形周溝墓	橋本昌幸	90軒を越す		環濠内	「環濠の内側には90軒を越す堅穴住居跡が検出された。」(p.34)
M	2016	横浜の弥生環濠集落		115軒		全体?	「115軒の堅穴住居が見つっています。」「大半の住居が弥生時代中期後葉のものです。」(p.2)
N	2017	華ひらく鶴見川流域の宮ノ台式文化	古屋紀之	118軒	含む	環濠内	「約2万㎡の範囲を環濠で囲い、その内部から宮ノ台期の堅穴住居跡118棟（重複・拡張などの建て替えも全て含めて）」「東側の環濠外で堅穴住居が1棟」(p.38)
O	2019	イネ作りと環濠ムラ	小倉淳一	115軒	含む	環濠内	「ムラ全体を囲む環濠の中から、のべ115軒にのぼる堅穴住居跡」(p.42)

2010年代以降

2013年の安藤による弥生時代集落の分析方法についての論文では、「大塚遺跡の住居址80基」とされた(安藤2013)。前述したガイドマニュアルの「調査時に番号を付した」数と同じである。

2016年の埋文よこはま(M)では115軒で「大半の住居が弥生時代中期後葉のもの」とされた。2017年の特別展「横浜に稲作がやってきた!?’の図録(N)では、環濠内118軒、環濠外1軒という数が示された。これは倉林(1997)と同じで、D2に基づくものと思われる。2019年の『図説都筑の歴史』(O)では「環濠の中」に115軒とされている。

小括

これまでに示されてきた大塚遺跡の宮ノ台式期の住居跡の数は、80軒から118軒までに及んでいる(数字が示されておらず一覧表のみのA2・D2を除く)。特に発掘調査報告書でも複数の数字が混在していた点が、その後もさまざまな数字が挙げられる要因になったといえる。

2 数え方をめぐる問題

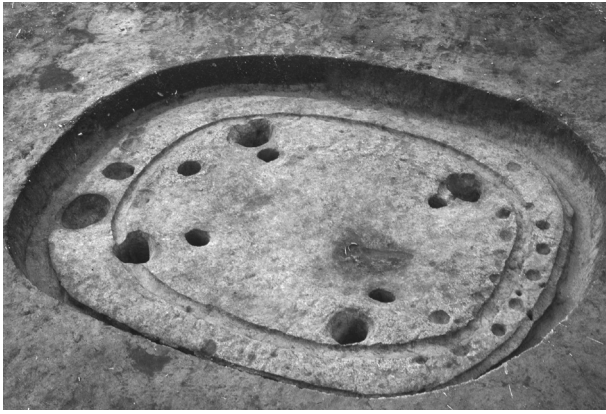
大塚遺跡の住居跡を数える作業に入る前に、問題となりそうな点を整理しておきたい。

重複した住居に対する住居番号の付け方

大塚遺跡における住居跡の命名は、基本的に不連続的重複を番号で区別し、連続的重複を枝番で区別するという方針で行われたようである。連続的重複とは、「同心円状」の重複とも呼ばれるもので、索溝が交差しない相似形の二つの堅穴が重なっているものが典型的である(図1a)。大塚遺跡では全て拡張の結果だったと報告されている。床面を共有していること、形態や軸の方向が一致していることから、新旧の住居には大きな時間差はなかったと考えられている。これに対して不連続的重複、あるいは不規則な重複とされたのは、軸の方向や位置がずれた状態で切り合っているものである(図1b)。不連続的重複では、新旧の住居の間にはある程度の時間差があったと考えられている。

だが、このルールにはいくつかの例外もある。Y6a号とY6b号は明らかに不連続な重複だが(図1c)、同じ住居番号の枝番によって区別されている。これはY6b号の壁溝が全周の1/4程度しか残っておらず、炉も失われていたためかもしれない。また、多重の重複がみられる場合、その中に不連続な重複があっても枝番での区別に留めているようである。Y20号では一番古いY20c号、Y65号ではやはり一番古いY65f号が、それぞれより新しい段階の住居と不連続に重複しているが(図1d・e)、枝番で区別されている。Y20c号はY20a・b号に大半を壊され、Y65f号は、Y65d号以降に全体が含まれているため、独立した住居番号を与えないという方針自体にはそれほど違和感はない。

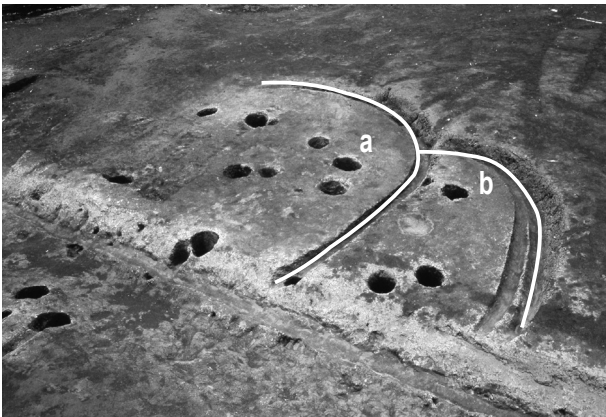
しかし、重複部分が多くとも独立した番号が与えられている場合がある。Y59号は、Y46号に大部分を壊されていて、1/5程度のみ残存している。この場合は、Y46号が弥生時代後期の住居であることから、弥生時代中期のY59号には別に番号を付けたと説明できる。一方、Y24号はY23号に炉を含む中央の大部分を壊されており、壁溝の一部と柱穴だけが残っている(図1f)。また、Y85号はY83号に大半を壊されていて、壁溝の一部のみ残存している(図3e)。これらにはいずれも独立した住居番号が付けられているが、前述した不連続な重複を数えなかった事例とどのように区別されたのかが不明である。



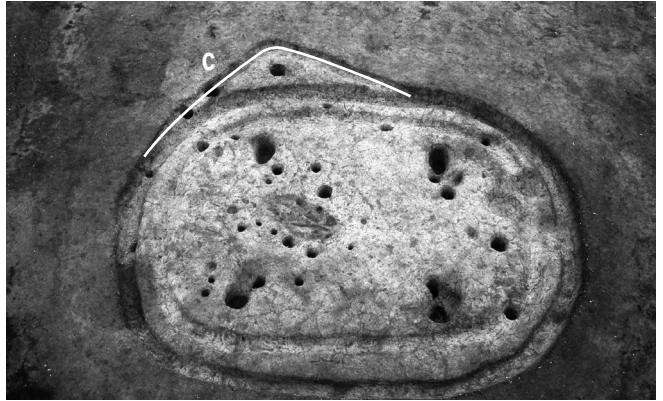
a. 連続的な重複：Y18号



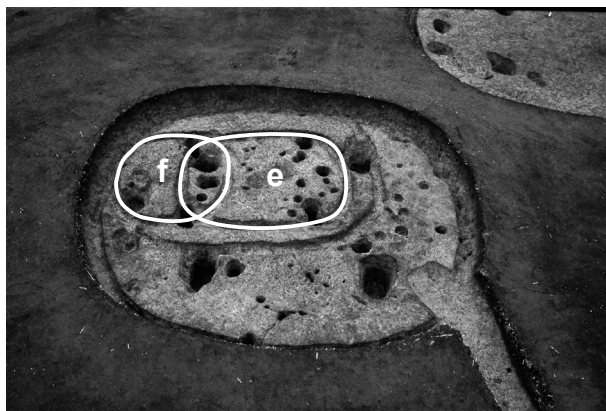
b. 不連続な重複：Y56号とY57号



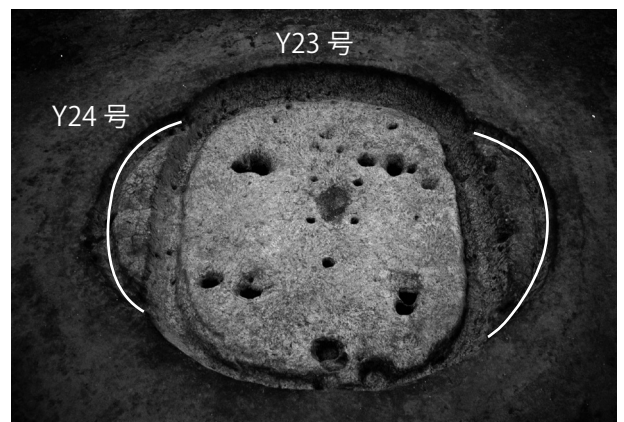
c. 不連続な重複：Y6a号とY6b号



d. 不連続な重複：Y20c号とY20a・b号



e. 不連続的な重複：Y65f号とY65e号



f. 不連続的な重複：Y23号とY24号

図1 大塚遺跡の竪穴住居跡(1)

連続的重複

いわゆる「同心円状」²の重複は、宮ノ台式期の住居にしばしばみられるもので、新旧の住居には時期差があまりなく、連続的に拡張された結果だと考えられている。典型的な同心円状の重複は、相似形の2つの竪穴が同じ位置で重複し、2本の壁溝がある程度の距離を保つものである（図2a）。しかし新旧の壁溝が近接する例や中心がずれた位置に作られる例（図2b）もある。

Y64号は壁溝だけを見れば同心円状ともとれるが、不連続な重複と報告された例である（図2c）。これは主軸の方向が25°ほどずれているためである。Y72号も、軸の方向と位置のずれを理由に「時間的な連続しない重なり」（報告遺構編 p.343）と報告された（図2d）。しかし、住居についての考察（D3）では「同心円状」の重複の一例として挙げられており（同前 p.425）、連続／不連続の判断が分かれている。Y64号・Y72号はいずれも壁溝の位置関係は「同心円状」とされるものと大きくは異ならない。新旧の床面のレベルはほとんど変わらず、炉も切り合っているので、新旧の住居に大きな時期差はないとみることも可能である。このように連続・不連続の区別は、常に明確に線引きできるというわけではない。

住居跡の認定

多くの住居跡で炉や柱穴に重複がみられるが、炉や柱穴だけが重複している場合は、「改築」だとみなして、枝番を与えていないことが多い³。しかし、Y2b号とY77b号は柱穴と出入口ピットのみで枝番を与えられている（図3a・b）。

一方、Y34号は重複のない単独の住居跡として報告されたものだが、柱穴は4本すべてが重複し、炉も重複していたと報告されている。また、平面図によれば、壁溝も北西側と南側で重複しているように見える（図3c）。これを重複例とみなさなかった理由は不明である。

Y54号は覆土中の硬化面から宮ノ台式の壺6点がセットで出土したが、床面には壁溝・柱穴・炉がみられなかった（図3d）。特殊な用途や作りかけの可能性が指摘されている。大塚遺跡の報告書本文では遺構編・遺物編ともに「竪穴状遺構」とされ、住居であるかどうかについての判断は保留されている。しかし一覧表では他の住居跡と区別されていないことから、本稿でも住居跡に含めておく。

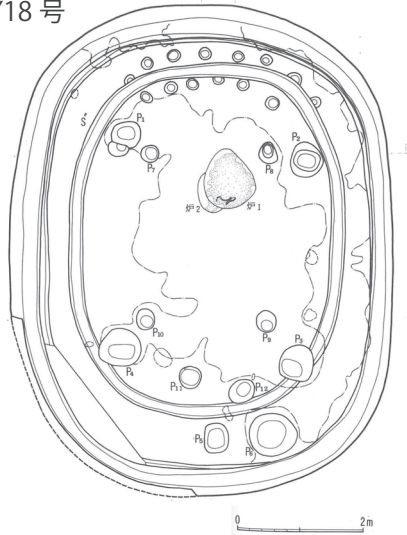
後期の住居

大塚遺跡における弥生時代後期の住居跡の数は7軒とするのが一般的である（表2）。しかし、実は同じ7軒といってもその内容が異なっている点に注意が必要である。

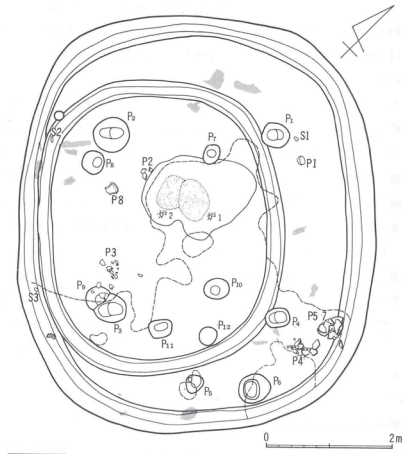
1976年概報（A1）では、住居跡の「総数」を97軒、うち7軒を後期の所産としている。この7軒という数はY46a号とY46b号の重複を別に数えた結果である。一方、報告の考察（D4）では、Y46号の重複を別に数えずに、6軒としている。さらにY27号も後期の可能性があるとして、これも含めた総数が7軒だとされている。重複を別に数えると8軒ということになる。

Y27号は平面形が長方形で、壁溝・柱穴・炉などが検出されていない（図3f）。遺物としては覆土出土の宮ノ台式土器片22点が報告されているのみである。報告書の事実記載では宮ノ台式期とされていたが（報告遺構編 p.199）、集落についての考察（D4）では後期の可能性が指摘されている（同前 p.460）。この住居を後期とみる根拠としては、平面形が長方形であること、宮ノ台式期のY28号を切るY1号土壙をさらに切っていること、位置的に後期の住居跡群の一角を占めること、主軸方位がY46号と共通することなどが

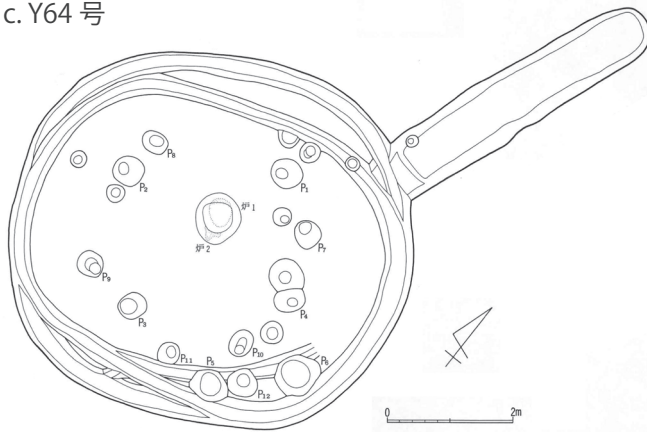
a. Y18号



b. Y15号



c. Y64号



d. Y72号

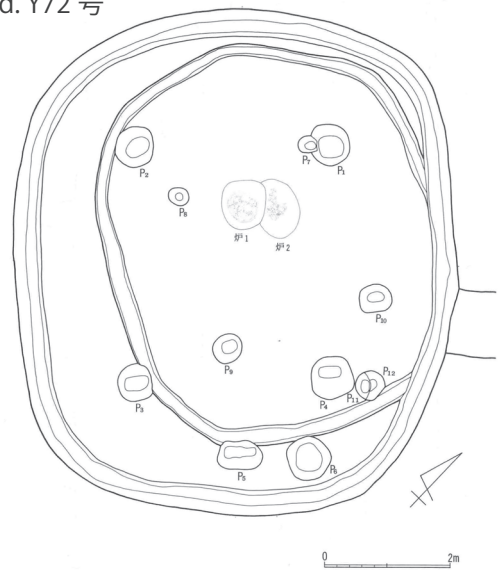
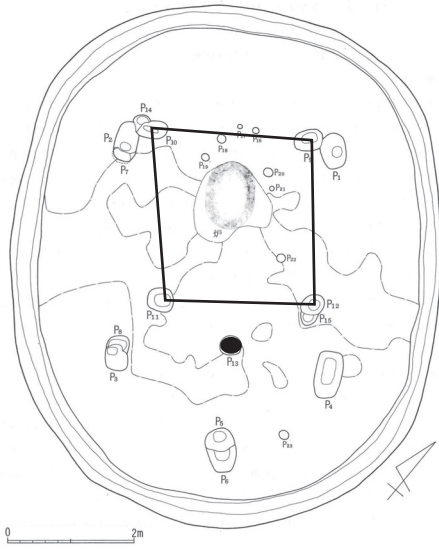


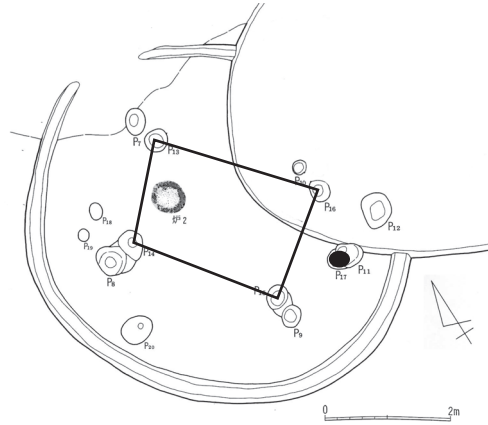
図2 大塚遺跡の竪穴住居跡(2)

表2 大塚遺跡の住居跡数についての報告・図録類での記載(後期)

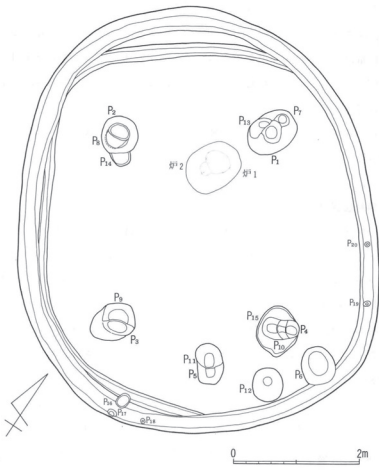
	軒数	重複拡張	内容
A1	7個	含む	「総数97個が発見されている。(中略)7個が後期の朝光寺原期の所産である」(p.101) 「後期の住居址は7個確認されているが、これらすべてが同時に存在したとは考えにくい。それは、Y-46a住居址とY-46b住居址が「不連続な重複」をしているからである。」(p.105)
C	7軒		「97軒(中期宮ノ台:90、後期・朝光寺原:7)」
D2	(7軒)	含む	後期1、久ヶ原・朝光寺原5、朝光寺原1
D4	6軒/7軒	含めない	「検出された後期の遺構は、竪穴住居址6軒と溝状遺構1基である。このうちY46号住居址は内側に古いb号住居址が重複しており、2段階にわたっている。」「Y27号住居址も後期の可能性があり、これを含めると総数は7軒となる。」



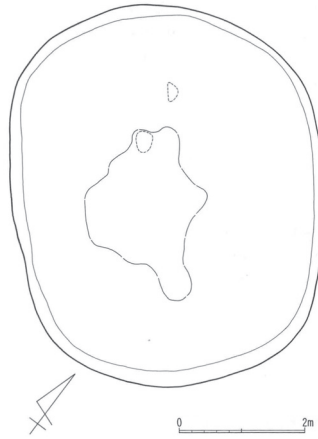
a. Y2b 号：柱穴と出入口のみ



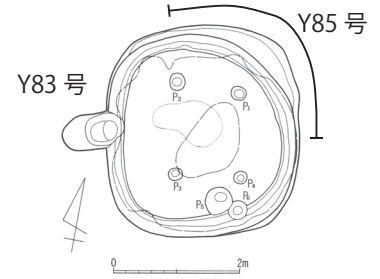
b. Y77b 号：柱穴と出入口のみ



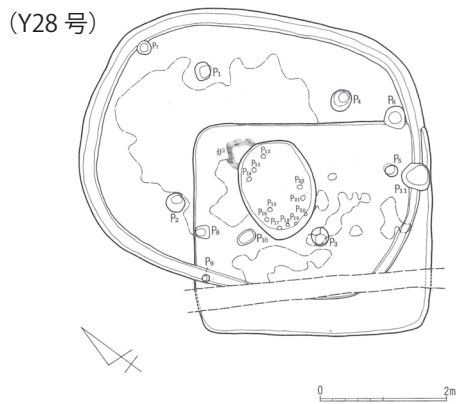
c. Y34 号：壁溝 (?)・柱穴・炉が重複



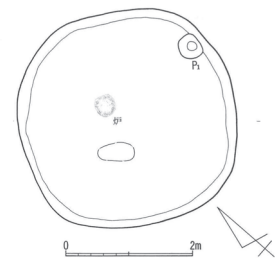
d. Y54 号：壁溝・柱穴・炉を欠く



e. Y85 号：壁溝の一部のみ残存



f. Y27 号：壁溝・柱穴・炉を欠く



g. Y22 号：壁溝・柱穴を欠く

図3 大塚遺跡の竪穴住居跡(3)

挙げられている。事実記載で中期とした根拠は明記されていないが、おそらく出土遺物によるものだろう。しかし、覆土からの出土遺物はもちろん時期決定の確実な根拠とはならない。例えば Y36号も出土した土器のほとんどは宮ノ台式であったにも関わらず、後期に位置づけられている（同前 p.220）。

もう1軒、Y22号も平面形が円形で壁溝や柱穴が検出されなかった点で、宮ノ台式期の一般的な住居とは異なっている（図3g）。遺物としては覆土出土の土器片31点が報告されているが、その中に朝光寺原式が4点含まれている。この住居跡についても、時期を決定する根拠は乏しいように思われる。

3 住居跡を数える

下記の方法で住居跡を数える。対象は環濠内に限定せず、環濠外の1軒も含める。Y27号と Y22号についてはひとまず中期に含めておく。

- a. 報告書で番号を付された住居を区別する（枝番は区別しない）。
- b. 報告書で区別されている住居を全て区別する（枝番を区別する）。
- c. 壁・壁溝の非連続的な重複を区別して数える（壁溝のみの部分的な重複を除く）。
- d. 壁・壁溝の非連続的な重複と壁溝の部分的な重複を数える（同心円状重複を除く）。
- e. 同心円状重複を含む壁・壁溝の重複を数える（壁溝のみの部分的な重複を除く）。
- f. 壁・壁溝の重複、柱穴の重複、炉の重複のうち、2つを満たしている場合を数える。
- g. 宮ノ台式期の住居間の重複は、いずれも半分以上が残っている場合に区別する。

a・bは報告書における住居番号にしたがって数える方法である。しかし、既に確認したように住居番号の付け方に一貫性を欠く部分があるため、記載内容にしたがって数え直したものがc～gである。連続的・非連続の区別については報告書事実記載の記述にしたがい、Y64号・Y72号については、どちらも不連続な重複とみなしている。また、c～gは基本的に住居跡として報告されたものを数えるかどうかの判断基準として適用しており、事実記載や図面から新たに住居跡を認定することはしていない。

結果は表3・表4に示した通りである。

aは重複を区別しない数え方である。80軒という結果は、ガイドマニュアルや安藤（2013）によって示された数と一致する。

bは重複を全て区別する数え方である。119軒という結果は、倉林（1997）やNと一致する。1991年報告遺構編の「弥生時代住居址一覧表」（D2）に基づいて算出される数である。

cは壁・壁溝の重複を数えるが、いわゆる連続的な重複（同心円状重複）や壁溝のみの部分的な重複を数えないものである。86軒という数は、報告遺構編の集落についての考察（D4）で示された85軒に近い。この考察ではY27号が後期である可能性を指摘しているため、この1軒のずれはY27号の時期比定の違いによるものかもしれない。

dは壁・壁溝の重複を数えるが、いわゆる連続的な重複（同心円状重複）を数えないものである。cに同心円状ではない壁溝の部分的重複のみられる4軒（Y6c・20c・Y23b・Y85）を加えた数である。90軒という数は、報告書刊行以前の概報等（A1・B・C）や報告遺物編（E）と一致する。

表3 弥生時代中期の住居跡一覧表

番号	時期	残存状況	壁/溝	柱穴	炉	a	b	c	d	e	f	g	備考
Y1	中期	完全	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	
Y2a	中期	完全	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	柱穴2本・出入口重複
Y2b				+			1						
Y3	中期	完全	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	
Y4	中期	ほぼ完全	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	
Y5	中期	ほぼ完全	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	
Y6a	中期	約2/3残存	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	
Y6b	中期	約1/4残存	+	+			1	1	1	1	1	1	b→a不連続
Y6c			+	+			1		1		1		壁溝一部・柱穴4本
Y7a	中期	完全	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	
Y7b			+	+			1			1	1		同心円状重複
Y8a	中期	約1/2残存	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	他に壁溝2本あり?
Y8b			+	+	+		1	1	1	1	1	1	
Y8c			+	+			1	1	1	1	1	1	
Y9	中期	完全	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	炉・出入り口・貯蔵穴が重複
Y10a	中期	約1/4残存	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	
Y10b			+	+			1	1	1	1	1	1	
Y11	中期	ほぼ完全	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	
Y12a	中期	ほぼ完全	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	炉重複
Y12b	中期			+	+		1					1	
Y13	中期	完全	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	
Y14	中期	ほぼ完全	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	炉重複
Y15a	中期	完全	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	柱穴4本・出入口重複
Y15b	中期		+	+	+		1				1	1	同心円状重複
Y16	中期	完全	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	柱穴1本・炉3個・出入口3個重複
Y17a	中期	完全	+	+		1	1	1	1	1	1	1	炉は17bと共通
Y17b	中期		+	+	+		1			1	1		同心円状重複
Y17c	中期			+	+		1					1	柱穴3本
Y18a	中期	ほぼ完全	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	
Y18b	中期		+				1						同心円状重複
Y18c	中期		+	+	+		1			1	1		同心円状重複
Y19a	中期	完全	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	
Y19b	中期		+	+	+		1			1	1		同心円状重複
Y20a	中期	完全	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	
Y20b	中期		+	+	+		1				1	1	同心円状重複
Y20c	中期	約1/5残存	+	+			1		1			1	不連続、壁溝一部
Y21	中期	完全	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	柱穴4本重複
Y22	中期	完全	+		+	1	1	1	1	1	1	1	壁溝・柱穴無し
Y23a	中期	完全	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	
Y23b	中期		+	+			1					1	壁溝は一部
Y24	中期	約1/5残存	+	+		1	1	1	1	1	1	1	Y23号に切られる
Y25a	中期	完全	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	炉重複
Y25b	中期		+	+	+		1				1	1	同心円状重複
Y26	中期	完全	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	炉重複
Y27	中期?	ほぼ完全	+			1	1	1	1	1	1	1	壁溝無し 長方形 時期の問題あり
Y28	中期	約2/3残存	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	
Y29	中期	ほぼ完全	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	柱穴3本重複
Y30	中期	約2/3残存	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	炉重複
Y32	中期	ほぼ完全	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	
Y33	中期	約4/5残存	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	
Y34	中期	完全	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	壁溝・柱穴4本・炉重複
Y39a	中期	約2/3残存	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	
Y39b	中期			+	+		1					1	
Y40a	中期	約3/4残存	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	炉重複?
Y40b	中期		+	+	+		1				1	1	同心円状重複
Y41	中期	完全	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	
Y42	中期	完全	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	柱穴1本重複
Y43	中期	約2/3残存	+	+		1	1	1	1	1	1	1	
Y44	中期	完全	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	
Y45a	中期	完全	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	
Y45b	中期		+	+	+		1				1	1	同心円状重複、炉重複?
Y47	中期	完全	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	柱穴4本重複
Y48a	中期	完全	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	
Y48b	中期			+	+		1					1	
Y49	中期	完全	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	
Y50	中期	完全	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	柱穴2本重複

番号	時期	残存状況	壁 / 溝	柱穴	炉	a	b	c	d	e	f	g	備考
Y51a	中期	ほぼ完全	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	
Y51b	中期		+	+	+		1			1	1		同心円状重複
Y52	中期	完全	+		+	1	1	1	1	1	1	1	主柱穴なし、炉2個、特異な形態
Y53	中期	ほぼ完全	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	
Y54	中期	完全	+			1	1	1	1	1	1	1	壁溝・柱穴・炉無し、作りかけ?
Y55	中期	ほぼ完全	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	炉3個・出入口重複
Y56	中期	完全	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	柱穴重複(6本→4本)、出入口重複
Y57	中期	約4/5残存	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	柱穴1本・炉・出入口重複
Y58	中期	完全	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	炉重複
Y59a	中期	約1/4残存	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	後期の46号に切られる
Y59b	中期		+	+			1				1	1	同心円状重複
Y60a	中期	完全	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	
Y60b	中期		+	+			1				1	1	同心円状重複
Y61	中期	完全	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	
Y62	中期	完全	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	
Y63	中期	約1/2残存	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	
Y64a	中期	完全	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	
Y64b	中期		+	+	+		1	1	1	1	1	1	柱穴4本掘り直し、壁溝2本?
Y65a	中期	完全	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	
Y65b	中期			+	+		1					1	柱穴1本
Y65c	中期		+	+	+		1				1	1	同心円状重複、炉重複
Y65d	中期			+	+		1					1	柱穴4本・炉
Y65e	中期		+	+	+		1				1	1	同心円状重複
Y65f	中期		+		+		1	1	1	1	1	1	f→eは非連続
Y66a	中期	完全	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	
Y66b	中期			+	+		1					1	
Y67a	中期	ほぼ完全	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	
Y67b	中期		+	+	+		1				1	1	同心円状重複
Y68a	中期	完全	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	
Y68b	中期		+	+	+		1				1	1	同心円状重複
Y69	中期	完全	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	P17～P20が重複
Y70	中期	ほぼ完全	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	炉3個?重複
Y71	中期	ほぼ完全	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	
Y72a	中期	ほぼ完全	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	
Y72b	中期		+	+	+		1	1	1	1	1	1	同心円状?不連続?
Y73	中期	完全	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	
Y74	中期	ほぼ完全	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	
Y75	中期	完全	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	出入口重複
Y76	中期	約3/4残存	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	
Y77a	中期	約2/3残存	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	
Y77b	中期			+			1						柱穴4本と出入口のみ
Y78a	中期	ほぼ完全	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	
Y78b	中期		+	+			1				1	1	同心円状重複
Y79a	中期	完全	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	
Y79b	中期			+	+		1					1	
Y80	中期	完全	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	
Y81	中期	完全	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	炉・出入口重複
Y82	中期	完全	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	出入口重複
Y83	中期	完全	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	
Y84a	中期	完全	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	
Y84b	中期		+	+			1				1	1	同心円状重複
Y85		一部残存	+			1	1		1				壁溝一部のみ
Y86	中期	約1/2残存	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	壁溝は一周する
						80	119	86	90	104	115	78	

表4 弥生時代後期の住居跡一覧表

番号	時期	残存状況	壁 / 溝	柱穴	炉	a	b	c	d	e	f	g	備考
Y31	後期	ほぼ完全	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	壁溝無し
Y35	後期	完全	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	
Y36	後期	完全	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	壁溝無し
Y37	後期	完全	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	壁溝半周
Y38	後期	ほぼ完全	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	壁溝無し
Y46a	後期	ほぼ完全	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	
Y46b	後期			+	+		1				1	1	
						6	7	6	6	7	7	6	

e は同心円の重複を数えるが、壁溝のみの部分的重複を数えないものである。104軒という数字は報告遺構編のD1の「100軒強」やD4の「100軒ほど」に近い。

f は壁・壁溝、柱穴、炉の3つの要素のうち2つ以上が重複している場合を数えるものである。どれか一つの要素だけが重複している場合は数えないが、Y27号・Y54号のように単独で炉や柱穴を欠くものについては、カウントしている。115軒という数は、報告遺構編の竪穴住居についての考察（D3）で示された「総延べ数」と一致する。

g は、重複の度合いによって区別して数えるかどうかを決定する方法である。連続的な重複は、一方が全て他方に含まれるので当然数えない。不連続な重複であっても宮ノ台式期の別の住居に大半を切られたり、拡張の結果含まれたりしているような例（Y6b号、Y20c号、Y65f号）については、区別して数えることはしない。残存部分が少ない場合でも、弥生時代後期の住居に切られている例（Y59号）や、さらに新しい時期に壊された例（Y10号）は、独立した住居として数えることにする。この数え方だと、Y23号に大部分を切られているY24号と、Y83号に壊されて壁溝の一部が残るだけのY85号はカウントされないことになり、aよりも2軒少ない78軒になる。

小括

大塚遺跡の住居跡として示されてきた数字は、それぞれ発掘調査報告書の記載に根拠を求めることが可能である。具体的にどの住居跡をどう数えたかが明らかにされていないケースが多いため、上で示した数え方が、それぞれの論者によるものと一致しているかどうかは確実ではないが、過去に示されてきた数字にもそれぞれ一定の根拠があったと考えられる。その上で、重複の度合いによって区別する数え方を提案し、78軒という結果を得た。

おわりに

2009年に横浜市歴史博物館に勤め始めて間もないころ、遺跡ガイドボランティアの方からの質問により、大塚遺跡の住居跡数についていくつかの数字が混在していることに気づいた。それから十年以上放置してしまっただが、今回自分なりに問題点を整理してみた次第である。

住居跡の数え方については、例えば同時存在の住居数を議論するためには、重複を区別して数えるのが適切であろう。これに対して発掘された遺跡の規模を示すことを目的とする場合は、目の前に見えるくぼみの数を示すのがふさわしいと思われる⁴。したがって、「大塚遺跡には何軒の住居跡があったのか？」という問いに対しては、まずは重複を区別しない数を答えるのが自然だろう。重複を区別しない数え方としては過去に80軒という数が示されているが、その根拠となる住居番号の付け方に一貫しない部分があったため、今回新たに78軒とする案を示した。ただし、これも住居の時期認定についての問題を含んだものであり、他にも筆者の見落としや考え違いもあるかもしれない。読者諸賢のご教示が得られれば幸いである。

【註】

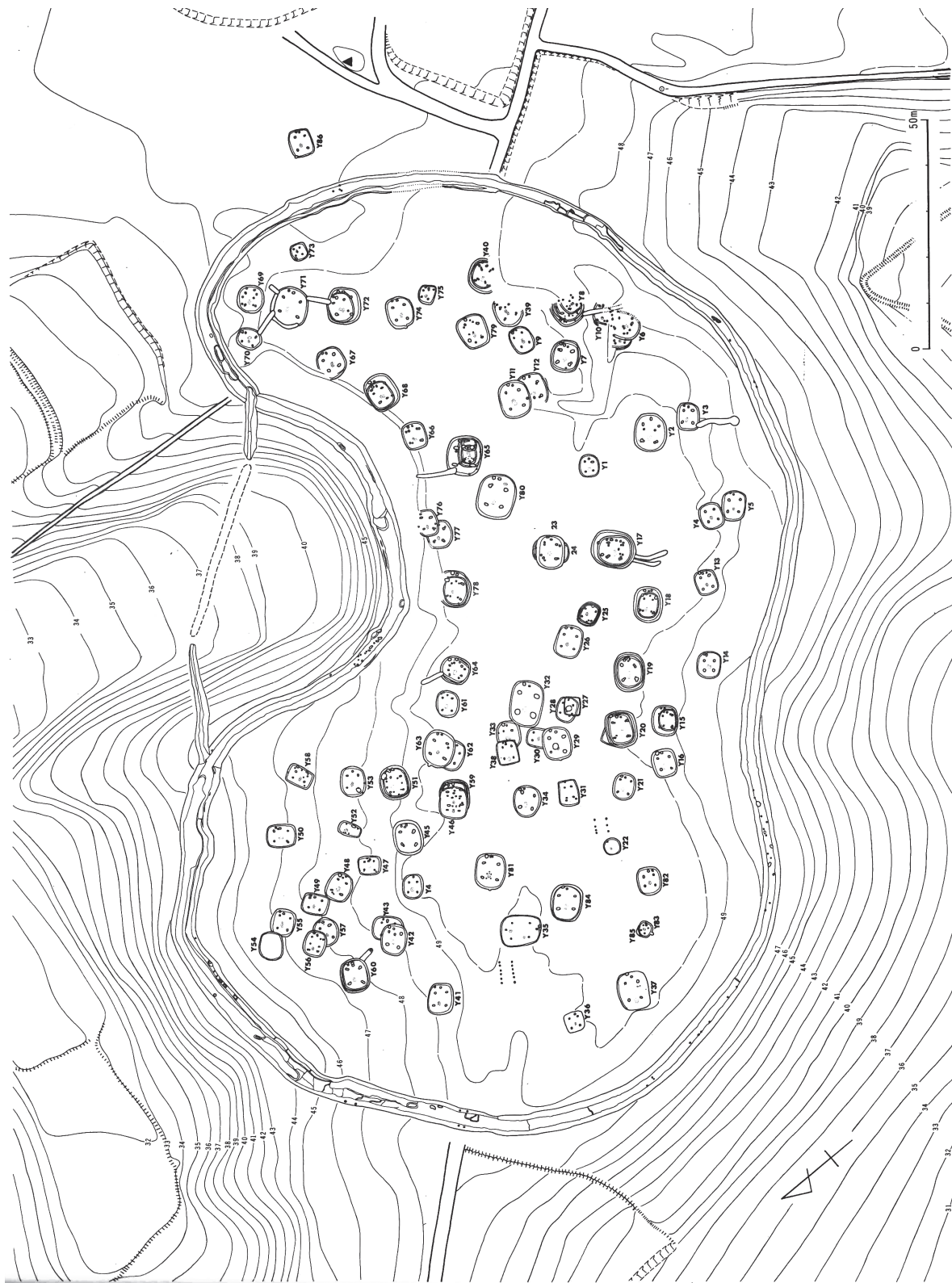
1 報告書編集にあたって住居跡の認定条件を整理して絞り込んだということだろうが、そのプロセスはやや分かりにくい。削除された住居跡は、ピットのみで炉や壁溝を欠く例が多いが（Y10c・Y21b・

- Y29b・Y51c・Y-56b・Y65g・Y69bの7軒)、ピットに加えて炉を有する例(Y8d・Y16b・Y33b・Y34b・Y40cの5軒)もある。一方、ピットのみで炉や壁溝を欠くY2bとY77bは残されていた。
- 2 この「同心円状」という表現は正確ではない。宮ノ台式期の住居はそもそも円形ではないし、中心がずれて重複している例もあるためである。しかし、壁溝が交差しない(切り合わない)重複を表すために、これに替わる適切な表現を思いつかないので、本稿でも使用している。
 - 3 前述したように1976年概報と1991年報告の「弥生時代住居址一覧表」を比較すると12軒(全体)が削除されているが、その多くは柱穴だけで認定されていたものであった(註1参照)。
 - 4 最近の港北ニュータウン遺跡群の報告例をみても、住居跡の総数として示されているのは、重複を区別せずに数えた数である(横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター2017)。

引用・参考文献

- 安藤広道 2013 「弥生時代集落遺跡の分析方法をめぐり一考察」『横浜市歴史博物館紀要』17:81-95
- 倉林眞砂斗 1997 「遺跡内分析の方法論的展望」『住の考古学』、同成社、pp.61-77
- 港北ニュータウン埋蔵文化財調査団 1976 「大塚遺跡発掘調査概報」『調査研究集録』1:91-113
- 佐々木由香・高橋 健他 2020 「大塚遺跡におけるレプリカ法による土器種実圧痕の同定」『横浜市歴史博物館紀要』24:1-14
- 『図説 都筑の歴史』編さん委員会 編 2019 『図説 都筑の歴史』、都筑区ふるさとづくり委員会
- 高橋 健 2021 「藤尾慎一郎『弥生時代の歴史』における横浜市大塚遺跡に関する記述について」『西相模考古』29:35-46
- 横浜港北ニュータウン埋蔵文化財調査団 1986 『古代のよこはま』横浜市教育委員会・横浜市埋蔵文化財調査委員会
- 横浜市教育委員会(文化財課) 1996 『国史跡大塚・歳勝土遺跡整備事業報告書』
- 横浜市ふるさと歴史財団 2009 『横浜歴史と文化』開港150周年記念、有隣堂
- 横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター 2016 『埋文よこはま』34
- 横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター 1994 『大塚遺跡 弥生時代環濠集落址の発掘調査報告II 遺物編』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告15
- 横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター 2017 『権田原遺跡II 弥生時代中期編』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告49
- 横浜市埋蔵文化財センター 1990 『全遺跡調査概要』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告10
- 横浜市埋蔵文化財センター 1991 『大塚遺跡 弥生時代環濠集落址の発掘調査報告書1 遺構編』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告12
- 横浜市歴史博物館 1995a 『横浜市歴史博物館常設展示案内』
- 横浜市歴史博物館 1995b 『弥生のいくさと環濠集落』
- 横浜市歴史博物館 2001 『甦る大環濠集落』
- 横浜市歴史博物館 2017 『横浜に稲作がやってきた!』

[横浜ユーラシア文化館 主任学芸員]



(港北ニュータウン埋蔵文化財調査団 1976 より転載)

図4 大塚遺跡平面図